

ナム・ジュン・パイク

Nam June Paik

1932-2006 韓国／アメリカ

アーティスト。日本で美学を、ドイツで音楽を学んだ後、61年にはフルクサスの活動に加わる。64年よりニューヨークに移り、ビデオ映像や電子音楽を用いたメディア・アートを創造。その作品にはテクノロジーと東洋の思想の融合が見られる。

1932 - 2006 South Korea/United States of America

Artist. After studying aesthetics in Japan and music in Germany, he joined the activities of the Fluxus in 1961. He went to New York in 1964 and created media art using video image and electronic music. The collaboration of technology and Eastern Thought is seen in his works.

ナム・ジュン・パイク

ユーラシアン・ウェイ

1993年

中央アジア製日用品、

40W電球、金属、

モニター14台、

映像3チャンネル、

再生機3台



Nam June Paik

Eurasian Way

1993

Daily products from Central Asia, 40-watt bulb, metals, 14 monitors, 3-channel audio visual image, 3 players

<ナム・ジュン・パイク展 パイク地球論 1993年9月8日～12月30日より> ユーラシア大陸の北の道の形に配した無数の日用雑貨と3種類の映像によって構成されたビデオ・インスタレーション。一つ目の映像は韓国でパイクが催したボイス追悼儀式の様相。二つ目は実際にパイクがこの作品のためにイルクーツクからモスクワまでを撮影したもの。三つ目は、ドキュメンタリー映画の一部を買い取ったもので、イルクーツクから蒙

古のウランバトルまでの映像。

ビデオアートの父として知られるナム・ジュン・パイクは、その活動の初期から人間の未来と情報やテクノロジーとの関係について言及し、作品のテーマとしてきたが、70年代、80年代にはそれらは予言者めいていて、あまり実体を感じられなかった。しかし21世紀になった現在、これらのメッセージは切実な響きを持ってきた。